

明治維新という日本の歴史の転換点で、福沢諭吉は江戸時代の大名や将軍に忠を尽くすことを中心とした倫理観・価値観と大きく違う「天は人の上に人を造らず」という世界観に基づいた倫理観・価値観を持ち、その後の日本に大きな影響を与えました。

「文明論之概略」では智徳の重要性をあげ、さらに智(ち)と徳をそれぞれ公私に分けたうえで、公智が最も重要と論じています。危機管理

やさしい こころと**経済学**

第2章 倫理観・価値観と絆 10

慶応義塾大学教授 大垣 昌夫

が重要となった今、公德である共同体の絆をもっと重視すべき時期かもしれません。

本連載では、まず心を無視している印象を与える新古典派経済モデルを用いても、規範経済分析に用いるときに倫理観を共同体への貢献を善とする徳倫理に変えたり、経済効率を重視する厚生主義と徳

倫理をバランスさせれば、推奨する政策が大きく変わりをすることを説明しました。

次に、徳倫理を取り入れると最適な政策が変化する背後には、徳倫理でのエウダイモニア(充実感)という幸福概念が、自分の消費や余暇に基づいた効用(満足度)の幸福概念と異なることをみま

幸福感への誤解を解く

た。高度成長期に育った私の幸福概念は長い間、効用でした。子供の時の夢は「自分だけのテレビを持ち、好きな番組を好きな時に見ることができたら、どんなに幸福になるだろう」というものでした。

今の多くの若者の夢と希望は、そのような物質的で家族のなかで孤立していくことではないようです。高度成長期に育った我々の世代が、自分たちが持っていた幸福概念を若い人たちに押し付けること

がないように注意する必要があります。あるいは、

それから絆の深まりによって個人の幸福感が上がることも多いことを東日本大震災の幸福感への影響などで説明しました。消費や余暇に基づく効用を個人が自由に追求していくと幸福になるという考えが誤解であるとする、その誤解を解くのを助けるのは学者の使命の一つとなります。(次回から「メンタルヘルス」を連載します)